

京都の中心地「烏丸通」は、

伝統と革新が交錯する場所。

京都の産業や経済の中心地でもありながら、

昔ながらの伝統や慣習、繋がりもあり、

場所だけでなく、人も世代を超えて、

分岐地となる場所です。

そのような場所で、これからの世代に繋ぎながら、

新しい関係性を紡いでいく人々を考えます。

「振り返り編」「現在編」「これから編」のパートに分け、

「烏丸通」についてお話を伺いました。

丸太町駅

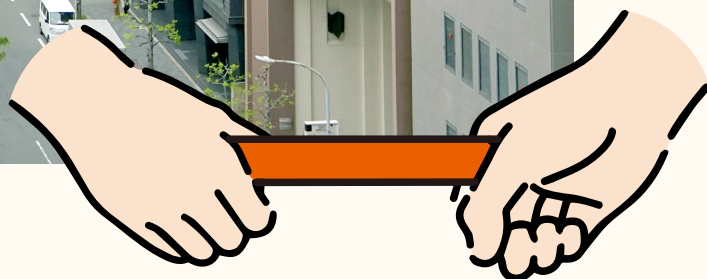
烏丸御池駅

烏丸駅
四条駅

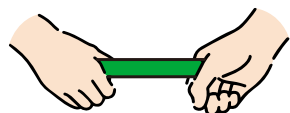
五条駅

烏丸通

京都市営
地下鉄



烏丸通から
繋げるバトン



振り返り編

この街で生まれて、暮らし、
商売をして、そして想う
「烏丸通」のこと

香老舗 松栄堂
畑 正高さん

にお話を伺いました



香老舗 松栄堂
代表取締役社長

畑 正高さん

京都市の経済活動地域として、様々な企業やお店が軒を連ねる「烏丸通」。都市的な機能だけでなく、昔ながらの町家や神社仏閣なども残り、伝統や生活とも密接に繋がっている稀有な場所でもあります。

そのような場所で生まれ、300年以上も続く「香り」を商いにされている「香老舗 松栄堂」の現社長・畑さんに話を伺いました。

——入社から、どういった流れで現在の役職に就かれましたか？

生まれた家が「松栄堂」という香りの製造メーカーだった、このことが私の人生のすべてです。製造現場から材料の調達、営業や販売に企画、広報、あらゆる仕事をしました。そして「バトンの渡しかた」といいますか……先代の父が賢かったと思うのは、私がまだ30代前半のころに会社をすべて預けてくれたのです。当時の私の肩書きは専務でしたが、40代なかばには社長になり、今日まで務めてきました。社長もそろそろ引退しないといけないと思っています。

——松栄堂のお香はインテリアとしても優れたものが多いですね。デザインについてどうお考えですか？

1954年、京都生まれ。大学卒業後、香老舗 松栄堂に入社。1998年、同社代表取締役社長に就任。香文化の普及発展のため、国内外での講演・文化活動にも意欲的に取り組む。アメリカにおいては、20年にわたる文化交流活動に対し、2004年ポストン日本協会よりセーヤー賞を受賞。京都経済同友会理事、京都府明るい選挙推進協議会会長などを務める。毎年7月の祇園祭では、長刀鉦囃子方として、50年以上関わっている。著書に『香千秋』（香老舗 松栄堂）、『香清話』（淡交社）、『香三才』（東京書籍）などがある。烏丸通まちづくり協議会では、長年会長を務め、取組をけん引。

このデジタル化が進む社会で、嗅覚という、実はとんでもないプリミティブ（根源的）な情報をそのまま扱っているんです。香りって目にはみえないから工芸品としては扱ってもらえないし、空間デザインの話においても、香りは意識から消えているんですね。「五感ってどういうふうに考えられているのだろう」といつも思います。視覚的、触覚的、聴覚的なものばかりになってしまっているのが現代社会です。衛生的にもレベルの高い社会に進んでいるから、人間性、動物性みたいなものをどんどん忘れていているんですね。

でも、嗅覚的なものはこれから注目されるはずですよ。たとえばコンサートでお香を焚くアーティストがいらっしゃいます。とても楽しいし、積極的に協力させていただきたいです。

——香りの調合では、時代が変わっても守るスタンダードなものもありつつ、新しい香りも開発されると思いますが、

香りの感性はどうやって磨かれるのですか？

基本は古典に学ぶことです。あらゆる生活の知恵は、歴史に学ぶことだと考えています。歴史にはとんでもないコンテンツ力があります。まじめに踏みこめば、自分自身の背景にある「迫力」にも気がつきます。新しいものだけを取り入れて、新しい仕事ができたら大間違いだと思います。

——京都には都市的な部分がありながら、昔ながらのお祭りや儀礼もたくさん行われますよね。伝統と革新について、どうお考えですか？

烏丸通は、地理的にも歴史的にも、現代の生活を考えても、京都という大きな都市の背骨のような位置づけです。責任は重いし、これからも大切に価値を育てていくべきだと思います。

烏丸通そのものの住民は本当に減ってしまいましたけれど、周辺地域には昔からのコミュニティや儀礼が残っています。京都の豊かな四季のなかで育まれた生活の知恵を、継承していけたらと思います。

——年中行事はやはり大切にされているのでしょうか？

はい。ショーウィンドウひとつとっても、ついこの間はお正月だったのに、つぎは節分と、しつらえをしています。お雛さんの飾りかたでも京都人はものすごくこだわるんです。みんなきちっと、向かって右側にお内裏さんを置きます。コミュニティの常識というか、ひとつのスタンダードなんですね。これを社内で若い世代にきちんと伝承できるかどうかです。年配者がメッセージを添える、ここまで関われ



松栄堂本社の畑さんの応接室からみえる烏丸通。条例により高さが制限されたビルが立ち並ぶ。畑さんは、この窓から何十年も街の変化を見守ってきた。

るかどうかに、責任が問われています。「なぜそうするのか」ということも伝えてあげないといけません。意識しなかったらどうでも良くなることばかりですよ。

毎年節分には一年間のお札を納めに行くのですが、そのあとに選挙へ行ったら、投票箱の管理をしている地域のかたに、「畑さん昨日節分どこ詣ったん」と聞かれました。「吉田（神社）さんと壬生（寺）さん行きましたよ」と答えると「うーん下御霊（神社）さんは待ってたけど来いひんかったんやな」とおっしゃるのです。下御霊さんはここの氏神さんです。氏神さんにもちゃんと寄りなさいと、70代の僕に対して言ってくれる先輩がいるわけです。面白いでしょう？ それに吉田神社へお札を納めに行って、お賽銭をして帰ってくる道で、京都のたくさんの知人に会うわけですよ。みんなやっぱりそういう生活のリズムを持っているんです。社員たちもそういうものを楽しんで、手伝ってくれる人がいるし、僕が忘れていたら教えてくれる人もいます。日本の香りが「伝統産業の一角」みたいにいわれますが、社内には若い人も大勢いてくれているんです。もちろん経験豊かな私世代の人もいて、男女の比率も五分五分かくらいかな。本当に活力ある仕事をみんなで続けさせてもらっています。

——松栄堂さんの内部でも文化の継承があるんですね。新しく参入した、この土地を知らない方々は風習への関わりを持ちにくいです。どういうふうに関係を築くと良いでしょうか？

お互いが健康的に関わりあえるコミュニティがあれば良いと思います。言われて鬱陶しいと思う自分がいるか、「そうか、面白いこと気にしてくれはる先輩やな」と思うか、ここが健康か不健康かで大きな違いがあります。地域社会のコミュニケーションは毎日あるわけではないので、新し



取材中に焚いていただいた平安時代の香りを再現したお香。貴重な原材料なので商品化されていないが、お客様を招かれた際には香りを楽しんでもらっている。

50年くらい先のゴールをみんなと 共有するようなまちづくりとか、 コミュニティを維持していけたら良いなど

くいらっしゃったかたと元から居てお誘いするほう、いかにポジティブにコミュニティのチャンスを活かしていけるか、これが肝でしょうね。

祇園祭って、町によってけっこう様相が違いますよ。自治体の「管理」が違いますね。たとえばマンションができれば、住人の皆さんに町内のコミュニティに入ってもらえるかどうかが問題になります。上手に迎え入れて、たくさんのかたが楽しんで動き出す町内は、マンションができて、つぎの活力が生まれていきますからね。そういう事例にも学びながら、ストレスを溜めないでおおらかに長く、50年くらい先のゴールをみんなと共有するようなまちづくりとか、コミュニティを維持していけたら良いなと思っています。

——烏丸通の変わらないところ、変わったところがありますか？

メインストリートであることは変わりません。でも街路樹がある部分にはもともと電車が走っていましたし、歩道も綺麗になりました。これは京都市が順番にやってくださっていること。

いま烏丸通に必要なと思うのは「歩道の明るさ」です。私が良い事例だと思っているのは河原町通の二条通周辺の歩道灯です。デザインとか色の問題じゃなくて、あれは単純明快に明るい。みなさんにも意識して歩いてみてほしいです。行政に怒っても仕方ないです。一緒に考えていきましょうと議論をはじめることが大事なんです。



取材後に、応接室に並んだ香料、
香原料に関するアーカイブを丁寧に
説明していただく。今では、手
に入らないものや、原料にできな
いものもたくさんあり、歴史的な
資料として保管されている。

——改めてお伺いします。京都について、どう思われていますか？

まずは京都に生まれ育って、仕事ができ幸せだなと思っています。実は京都にはあのパリに負けないような写真が撮れる場所がいくつもあるんです。共通しているのは、ほとんど電線がないこと。ただ京都を代表する二条城の前などには、まだ電線がピューっと一本走ってるんです。電線の地中化には莫大なお金がかかりますから、いっぺんにや

ろうというのは無理でしょう。ですが、これ以上増やさないと決めることと、機会があれば一本でも減らしましょうという意識を共有することはできるはずですよ。世界に学んで、「50年後にはこういうふうにしていこう」という長いスパンの議論を、行政も地域社会も専門家のみなさんも巻きこんで行うべきです。容積率が非常に制限されているパリの街に、あれだけの人が憧れて来る。京都も学べばやれるはずなんですよ。

(インタビュアー：平野拓也デザイン事務所)

畑さんに大学生からの質問させていただきますっ！

京都で生まれ育ち、現在まで街の重要な伝統文化を担う畑さんへ、大学進学とともに京都で暮らしはじめた、正反対の立場の学生が質問しました！（質問者：京都芸術大学文芸表現学科 山口楓生）

—— 300年の歴史が続いているっていうのはものすごく大変なことですよね。さらに香りは形のないものですが、「松栄堂らしさ」はどういうところとして受け継がれてきましたか？

すごく愚直にこだわることでしょね。歴史のなかに開発された「普遍性」みたいなものがあって、これがなにかを学ぶ。たとえば源氏物語に出てくる香りについて一生懸命調べたり、再現してみたりして。1000年も前の香りがどうしていまも使われるのか。これは「普遍性」があるからでしょね。

実はその香りに使われる素材は国内にないんですよ。源氏物語が書かれた当時も日本にはありませんでした。ずっと、アジアの国から供給を受け続けているんです。鎖国の時代もこれは続いていました。つまり1000年間その香りを「私はこれが良い」と思って楽しんでいる人々の価値観があって。これを具現化するために、貴重な材料を、先輩から教えられた通りに使うことによって、素晴らしい香りの生活が享受できるという知恵がどんどん受け継がれてきたわけでしょう。ここには僕らが小手先で提案するようなものとは違う普遍性があると思うんです。こういった営みを振り返ってみたら、商いを300年続けさせてもらっていたという事実です。

—— 1000年前の香りは実際に販売されているんでしょうか？

実物はありますが、商品化はできません。いまこの香りを作るためには、ワシントン条約で保護されている、いま日本には輸入できない素材が必要なんです。でもうちはおかげさまで戦前から続けているから、素材の在庫を持っているんです。これをすこし使わせてもらって、再現したんです。講演会や取材の際にだけ、一本焚くことがあります。楽しいよね、1000年前の香りを、400年前のお線香という発明のおかげで、簡単にみんなで共有できる。

それが京都で生活している現実だと僕は思うんです。

たとえば、平安時代のレシピで「六種のたきもの」と呼ばれる香りがあります。春夏秋冬と、季節のないものと、季節を超越したものという、6通りのテーマのレシピがあるんですよ。平安時代の貴族たちが、京都で四季の変化を享受し、築きあげた美意識や価値観です。

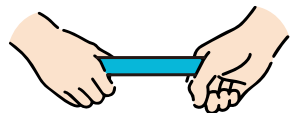
それを学んだ僕らが21世紀の生活になにを提案できるか。焦る必要はありません。ひとつひとつ確信と自信を持って提案すれば良いと思っています。

—— この街にまつわる、意外な雑学はありますか？

丸太町に「竹邑庵太郎敦盛」というお蕎麦屋さんがあってね。平家物語にも出てくる平敦盛という良い若武者がいるんです。教養があって、鎧武者で腰に刀と「笛」を差していました。戦が落ちて、月が昇れば、波打ち際で笛を吹いていたそうです。静けさのなかで自分自身が生きていることをしみじみと噛み締めていたんですね。その「あつもりそば」だと思って、若いころの僕は「食べんとあかん」と思いました。

でも「あつもり」っていうのは「熱い盛りそば」だったんです。まったくの歴史パロディでしょ。そういう楽しさがある街です。

それからもうひとつ。四条烏丸の交差点を東へ、一筋目を北へ、また一筋目を西へ、そしてまた一筋目を南へ歩きましょう。元へ戻ってきますよね。すると、光源氏の大邸宅・六条院の一角を歩いたことになるんですよ。この物理的な距離が未だに京都のどまんなかで体感できるんです。歩数だってほとんど同じですし、東山までの距離や西日の射しかた、そういった景色も変わりませんよね。ちょっと歴史を探求すればこういう話はいくつも引っかかてきます。まだまだ僕も知らなきゃいけないと思うんですよ。



現在編

株式会社長谷ビル
長谷拓治郎さん

香老舗 松栄堂
畑 元章さん

株式会社 リーフ・パブリケーションズ
加藤純子さん

株式会社 HOSOO architecture
細尾直久さん

いま見える街の景色から
「烏丸通」のことを
みんなで話しましょう

※司会：平野拓也デザイン事務所

に座談会をしてもらいました

「烏丸通」には、様々な業態で社会に寄与している企業がたくさんあります。今回は、その中でも、地域や文化活動にも積極的に携わっている4つの企業の方々にお集まりいただき、「烏丸通」の〈現在〉→〈これから（未来への展望）〉についてお話いただきます。

司会：まずは自己紹介と、会社のことをそれぞれお話していただけますか。

長谷：長谷ビルの代表取締役の長谷です。

烏丸通まちづくり協議会では、家族や友人ともまた違った繋がりの中でお会いできてお話ができることがとてもいいなと思っています。世代が重ねられてまた次の世代に渡ったとしても、またこういう場があって繋がり生まれる、みたいなことがあるとすごく嬉しいなと思っていますし、そうやっていきたいなと思っています。

私どもの会社は、オフィスビルやマンションの賃貸業を中心としていますが、本質的に美しいものであるかどうかということ、そしてその価値を守っていくということを大切にしています。たとえば私どもの本社は築110年の古い建物なのですが、経済合理性から言えば新しい建物を建てた方が会社にとってはプラスかもしれません。しかし私共は

その空間が美しいと思って、それを烏丸通に残していくということに意味があると思っています。そういうことを大切にしながら会社の運営をしております。

細尾：株式会社 HOSOO architecture の代表取締役の細尾と申します。

私は一級建築設計事務所をやっていて、社屋やギャラリー、住宅、学校など、多様なプログラム・用途の建築を設計・監理することを仕事としています。

建築や空間一つひとつを作る立場で仕事を続けていますが、それと同時にある種の引きの目線で、私たちが普段慣れ親しんでいるような烏丸や京都の街に対してどんな貢献ができるのか、どういう風にやったら面白いんだろうかということはこの烏丸通まちづくり協議会で一緒に考えて試行錯誤していくことはすごく豊かだなと思っていますし、意義があるなあと感じます。楽しくやらせていただいています。

私たちの建築設計事務所において常々心がけていることとしては、クライアントがいらっしゃって、その思いや望まれていることを空間的に実体化することが仕事であると同時に、建築には第三者、公共もしくは都市に対してのある種の責任であるとか、公共財という側面があるので、クライアントのためであると同時にそれが街や街並み、都市に対してどのような貢献ができるのか、あるいは世代をま

たいでそれがどのように文化的にパトンタッチできるのか、そういったところも同時に心がけながら仕事をしている次第です。

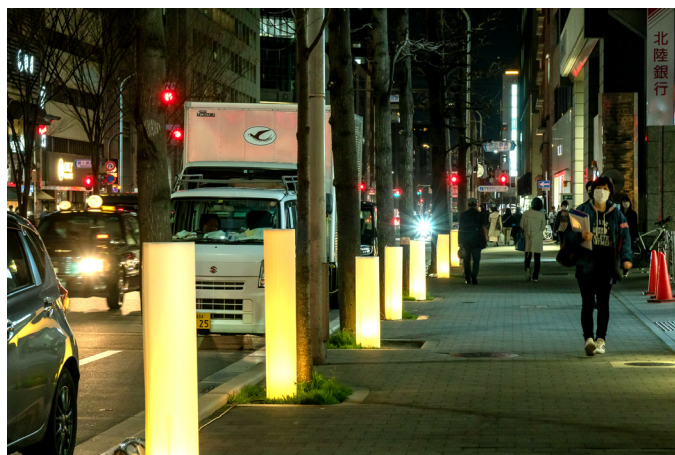
加藤：リーフ・パブリケーションズのメディア事業部編集統括の加藤と申します。リーフという雑誌を27年出してきて、地元の方々に向けて発信してきましたが、他府県、そして海外に向けて京都の今を発信しないと京都に賑わいが生まれないということにコロナ禍で直面し、雑誌は年末に一旦お休みをさせていただくことになりました。今はウェブとSNSに力を注いでいます。

京都の情報発信だけでなく、日本酒のよさを発信するウェブメディアも運営しています。うちはイベントもよくやらせていただいて、京都の伏見の酒蔵さんとも仲良くさせていただいたご縁もあり、日本酒をもっとグローバルに、資産価値として高めるような取り組みをできないかということで、NFTとお酒を掛け合わせて発信するウェブサイトを年末に立ち上げたところです。

まちづくり協議会自体にはまだまだ新たに関わらせていただいたところで、みなさんがどういう思いでこの烏丸通を守っていこう、育てていこうという風に動いていらっしゃるのかを改めて肌で感じることができるようになりましたので、これからもっといろんな方といっしょにコミットしていけたらいいなと思っていますところです。よろしくお願いします。

畑：松栄堂の畑です。

うちは創業は1700年少し頃と言われております。それが



今回の座談会メンバーと京都市が中心になって実施した「烏丸通あかり LAB」(2022年3月)。1日限定で歩道に照明灯を設置し、烏丸通の夜の風景の在り方を考えた。

らずっと、宗教的なお線香や、お部屋で楽しめるお香などを作ってまいりました。基本的には製造から販売までを手がけるということは変わっていないのですが、イベントも含めどうやったら新しいお客様にお越しいただけるだろうということを考えてながら仕事をしています。

今でこそ烏丸通側を正面としていますが、烏丸通の拡張整備の際にこちら側に入り口をしつらえたと聞いておりまして、それまでは反対側の車屋町通の方が正面玄関だったということです。2018年に薫習館という建物をオープンして、今は若い方にもたくさんお越しいただいています。

私自身が烏丸通まちづくり協議会を意識したのは、「烏丸花族」です。月に1度の機会ということで行ってみると、他の会社の方達みなさん法被を着てゴミ拾いをされていて、ああこういう風な形で繋がるのは面白いなあと感じたのを覚えています。

普段烏丸通を歩いても何も感じませんでしたが、たとえば地震がくるとインフラは止まってしまいますし、普段何も気づかないくらい整備されていることがいかに大切なのかも考えながら、烏丸通を歩くようにしています。

子どもがいと街の景色や見え方、接し方が変わってきたなあとも感じています。

長谷：過去に参加してくださったものや、私たちと烏丸通まちづくり協議会との繋がりなど、何か印象に残っていることはありますか？

細尾：やっぱり照明実験が個人的にも面白かったですね。照明で街路空間がかなり変わって、体験として豊かなものになりうるということを再認識させてくれる機会でした。それと同時に、現実的ないろんな諸要件というのを精査していくとなかなかハードルも高いなということを学ばせていただきましたので、最初のとっかかりとしてよい出来事だったと思っています。

長谷：私も烏丸で不動産をやっている割に、自分たちの建



株式会社長谷ビル
代表取締役社長
長谷拓治郎さん

1980年、京都生まれ。大学卒業後、大手製菓会社の営業職を経て、2006年株式会社長谷本社に入社。2010年に米国デンバー大学でMBAを取得し、帰国後、オフィスビル・マンションの運営に関わり、2014年より株式会社長谷ビル代表取締役。地域コミュニティへの貢献、交流を目的により良き通リとなることを熱望し、烏丸通まちづくり協議会に参画。

普段の仕事の延長とまた違うところの
繋がりが不思議とまた繋がることって、
よくあることなんですよ。

物以外の照明に関してゆっくり見る機会はありませんで、お恥ずかしながら発見が多かったです。あそこはすごく照明にも気を遣って建てられているんだな、ここはそうでもないとか、いろんなものが見えてきて、これは新しく街で何かをやるときにはすごく気をつけなきゃいけないと勉強になった記憶があります。

加藤さんは何かありますか？

加藤：最初はライトアップのとき、烏丸通をみなさんと歩くというのも面白かったですし、イベント当日の設営までみなさんがされているのをお手伝いするのもとても新鮮で印象的でした。通ごとの雰囲気も変わるんだなあというのも改めて感じましたし、夜割と寂しいところもあれば、意外に電気が強く

くてまぶしいぐらいのところもありましたね。

長谷：そうですね、1階の店舗の明かりとか、意外とこんなにも明るかったんですよと思いました。

加藤：ボソッとおっしゃっていたのを思い出します(笑)。確かに昼にも夜にも発見があって、改めて烏丸通というところを見ることができたなと思いますね。

司会：照明実証実験について、具体的にどういうプロジェクトだったのかご説明いただけますか。

長谷：まちづくり協議会の理念に「風格と華やぎの烏丸」というものがあるんです。それを達成するためにある項目のうちのひとつが「夜も安心して歩けるまちづくり」だったんですね。それを創り上げるためには、畑会長（※畑正高氏）が「照明をつけることがそれに繋がるんじゃないか」と。夜間に仮の電気をつけたときにどういう風に見えるかを実験しました。場所は3箇所で行なって、ひとつは道路の中央分離帯に植えてある等間隔の木を照らして。烏丸御池のところは大きな木を下から照らしあげて、待ち合わせの目印になるんじゃないかとか。烏丸蛸薬師のところでは、1メートルくらいの灯籠を等間隔に置いて、歩いている方々にとって目につくし、安全確保の側面は実際どうだろう、といったことを実験としてやったものが照明実証実験です。

司会：ただ光を置いてみるだけでなく、様々なプロダクトや置き方や場所を検証して、どう見えるかどう伝わるかを検証したということですか？

長谷：おっしゃる通りです。実際に我々もそこに行って、歩いている方々に実際どうでしたかとアンケートをとってみました。いろんな反響がありましたね。

畑：そうですね、照明実証実験は1回で終わってしまったのが本当にもったいなかったなとつくづく思います。

あとは清掃活動の「烏丸花族」がなくなってしまったのは本当に残念です。うちの会社独自で月1回、朝9時前から30分ほどゆっくり歩きながら、町内ワンブロックのゴミ拾いをするんですけど、結局それも町内っていうエリアだからできるなと。烏丸の北の丸太町から御池までできるかと言われたら、自分たちのエリアじゃない場所でゴミ拾いしてええんやろうか、みたいな遠慮が出てくるのが、それが「烏丸花族」という枠組みを軸に自由に動けたというのは大きかったなと思います。「町内をいつも掃除してくれてるね」みたいな繋がりができたのもよかったです。そういうエリアを超えた軸で関わるができる活動ができたらいいなと。

それが清掃なのか照明なのか、全く別のものなのか、いろんな考え方があると思うんですけど。

長谷：僕たちが掃除をやった時ってあんまりゴミがなくて、元々綺麗やったんですよ。今は海外の人や観光の人たちが増えたりして、あのときとはゴミの質が変わってるんじゃないかなと。そういう定点観測みたいな面白さもあるんじゃないかと思っています。またぜひ何かできればなと思います。

司会：それぞれお話をいただいた上で、日々大切にしようと思ったことや、今の話とは関係なく大切にされていることがあれば一言ずつお話いただけますか？

長谷：やっぱり人との繋がりを大事にしています。普段の仕事の延長とまた違うところの繋がりが不思議とまた繋がることって、よくあることなんですよ。まちづくり協議会も僕にとってはそういう繋がりの大切なものであって、そこからまた何か未来に作り上げることに繋がって行くんだなあと思います。

司会：畑さんはいかがですか？

畑：2月にパリに行ったんですが、中心地にデパートみたいな建物があって、その上のテラスから街を見渡すことができます。やっぱり京都以上に高さ制限が厳しいのが分かりますし、パリという街のブランド価値があって、家賃や人件費のことを超えてでもここに店を出そうと世界中の人たちが挑戦してるんだと思ったら、京都にも祇園の花見小路とかまさにそういうようなところもたくさんありますし、そこに烏丸通がどうやったらなれるのか、ということを考える機会になりました。

この烏丸通まちづくり協議会の活動をしてなかったら、この烏丸通のレベルやブランド価値みたいなものをどう

やったらあげられるんだろうと考えてなかったと思います。

長谷：こうやってみんなが集まっているので、いろんなところにこうしていきましょうと提言することに繋げていきたいですね。

畑：あとパリがすごく歩きやすいなと思ったのは、歩行者と自転車との分離が徹底されていること。自転車は自動車扱いで、歩道は人しか歩いてないところが日本と全然違うなと思いました。かといってあちらは歩きタバコの人が多くて、吸殻も多いですけど。

司会：ということは、ゴミを捨ててもいいやという人が多い中で、街の人たちがうまく管理しているっていうのがあって、うまく棲み分けができているということなんでしょうか？

畑：多分民族性の違いみたいなことだと思うんですけど、今日も商業施設のトイレに入ったら「喫煙禁止」とか「禁煙」とか「ゴミは持ち帰ってください」みたいな紙が何箇所も貼ってあって。綺麗だけど、綺麗じゃないみたいな。ゴミは〇〇して捨ててください、といった警告文って社内でも多いんですけど、もう少し上手な言い方やり方があるのかなと思います。

長谷：そうですね、クリーンネスって意味での綺麗さは保たれるかもしれないですけど。感性としての綺麗さや美しさがこういう場所に対して活かしているかどうかと言われたら、ヨーロッパはそれが強いですね。そこの違いが、ブランディングに現れているんじゃないかという風に思いました。

細尾：今の畑さんのお話って、言い方を変えるとすごく消極的にクレーム対策でやっているような感じがあって。社会全体の風潮の反映なのかなあという風にも思いますね。

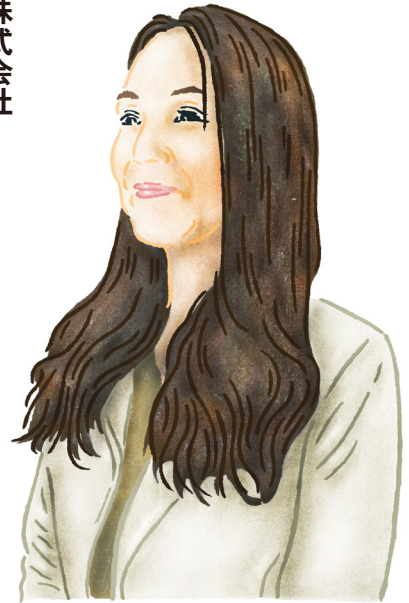
長谷：結構民族性があるんじゃないかなと思いますね。ミスが許されないというか、みんなとキチッと守っていかうとする。

電車のダイヤにしても、新幹線なんて1分単位で来なかったって全然いいですね。でも遅れたらめっちゃ怒ってる人がいるでしょう(笑)。あれが社会の圧力になって、どこかひずみになっていると思うんですね。それって本当に守るところなの？そんなことないよっていう、そういうおおらかさがほしいなと思いますね。

細尾：畑さんがおっしゃっていたお話は景観とかまちづくり、空間をどう作るかって話とダイレクトにつながっている部分ではありますよね。

司会：壁紙を増やすのではなく減らしたらどう見えるのか、貼るにしてもどういうことだったら観光客の方や住民の方にいいなと受け取ってもらえるのか検証する「おおらかさ

株式会社
リーフ・パブリケーションズ
取締役メディア事業部編集統括
加藤純子さん



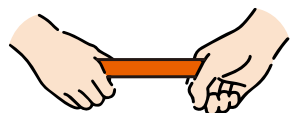
1972年、京都生まれ。京都・滋賀のタウン情報誌 Leaf (1996年4月25日創刊、2023年12月25日発行以降不定期発行) の編集長、局長、統括を務め、Leaf 以外にも MOOK・書籍、フリーペーパーなどを制作。Leaf は 2024 年よりウェブにさらに注力し、京都の魅力を全国・世界に発信中。また、全国の日本酒を盛り上げるべく、日本酒×NFT プロジェクト「Sake World」をスタート。地域の活性化を担う媒体として、烏丸通まちづくり協議会に参画。

プロジェクト」みたいなものがあっても面白いのかなあと思いました。この街がおおらかだよねと思えたら、自然と人もここを通りたくなるような街になるかもしれない。

長谷：たとえばレストランに入った時、子供が小さいと暴れたりして、親は結構気にしちゃうんですね。結構注意してくるレストランもあったりします。でも、あなたたちも昔子供だったでしょと言われるれば、もう少しその子供達にとっておおらかでいられるんじゃないかと思ったりするんですね。子供が走っていても叫んでいても、なんとなく許される雰囲気というか。ヨーロッパでは、子供を連れて行くと割といいところに席を置いてくれるんですよ。周りの人たちも子供に対して理解がありますし、声をかけてくれたりもします。

フィリピンからうちと同じ年の子供を連れた友達が来たとき、東京のピザ屋さんに行ったら、子供オクケーって言ったのにうるさくて追い出されちゃって。最後はデザートが出てきてないのに伝票を置かれて、出て行ってくださいって言われて。後で友人に言われたのが、「そらお前ら出生率上がらんわ」って(笑)。こういうことが平気で起きてるといのが、なんなんだろうなと思っています。

司会：今のような課題を、どういう風にこの街として受け止めて、どういうことをしていくと子供たちにとってよりよい影響を与えたり、大人たちも住みよくなったり、それをみた観光客の人たち、ここを通る人たちがどう過ごしやすくなるかというお話をこのあとできればと思います。



これから編

問題や課題があるからこそ
新たなチャレンジを
「烏丸通」で

引き続き！

株式会社長谷ビル
長谷拓治郎さん

香老舗 松栄堂
畑 元章さん

株式会社 リーフ・パブリケーションズ
加藤純子さん

株式会社 HOSOO architecture
細尾直久さん

に座談会をしてもらいました

前半は「烏丸通」のいまについて、様々な視点からたくさん話していただきました（ページの都合上省略しましたが、もっと多くの有意義な議論ができました）。後半は、そういった現状を鑑みて、ポジティブにこれからこの「烏丸通」でこうなったらいいな、こういうことをしたらいいんじゃないか、など話してもらいました。数年後には机上じゃなくて、本当にカタチになっているかも！？

司会：現在編では今までの取り組みや話題をそれぞれにお話いただきました。それを踏まえて、こんな取り組みができれば面白いなというお話や、具体的なイメージがしやすいような未来、例えば30年後の京都のために何ができるかというお話ができればと。

長谷：僕はイベントをやりたいなと思っています。過去にうちの父が現代アートのイベントを開催したとき、世界中からいろんな人に来ていただいて、1回ではすごくもったいないなあと思っています。

イベントは自分の誇りでも街の誇りでもあり、街の人たちのモチベーションに繋がると僕は思っていて、そういう活動を未来に向けて定期的にやっていきたいです。

細尾：ヴェネツィアは人口が30万人もいないような街ですけど、ヴェネツィア・ビエンナーレのような芸術と建築の展示が毎年交互に開催される芸術祭があって、映画祭もあって、いろんな人がトッププレイヤーでやってきて街と交流する。それだけでその場所がすごくスペシャルなものになりますし、そういうものがあるともものすごくいいですね。

長谷：京都は世界の中で名が通っていて、その都市が世界に向けたイベントをやらないのはもったいないと思っています。その中心である烏丸はメインになりうる場所なので、ものすごく意義のあることだと思います。

畑：うちは京都新聞社さんも近いので、そちらで最近芸術系のイベントが開催されると人の流れが全然違うんですよね。カウンターだけの喫茶店でもKYOTOGRAPHIEのサテライト会場として参加されていたりして、そういう気持ちを持つこと、参加することで人の賑わいが生まれて、烏丸通がもっともっと変わっていける余地があると知ってもらうことが大事だと感じます。

加藤：アートは特にすごく注目されてますよね。アートを通して京都の食文化も一緒に発信できたらいいなと思います。いちばんそれが人が来やすいのかなと思います。

長谷：不可欠なところですね。京都はもう充分味わえる

香老舗 松栄堂
専務取締役
畑元章さん



1981年、京都生まれ。立命館大学を卒業後、2007年に家業である香老舗 松栄堂に入社。製造・販売・営業を経て、2018年に専務取締役。ワークショップや講演を通して、お香の楽しみ方を伝えている。烏丸通まちづくり協議会は清掃活動を通して参加。

ものがたくさんあるので、いろんな文化や建築に触れたり、いろんなイベントに参加しながら住むこともできるし、そこで滞在して仕事もできる。そういうような流れができればすごくいいんじゃないかなと思っています。

細尾：都市を上空から見下ろすような神目線じゃなくて地べたをクンクンしながら散歩するワンちゃん目線でブラブラしても楽しいとか面白いとか、そういう目線で街はできていくべきですし、京都が面白いのってそういうものがあるからだと思っているんですね。

街を歩いて、オープンカフェに座って人が歩いているのを眺めたり、コーヒーを飲んだり、本屋に寄ったり、誰かに会ったり、漬物屋の横に喫茶店があって、その隣によう分からんギャラリーがあって、その上が会社のオフィスでとか、多様な人たちがいて寄り道する情報量がいっぱいある。ヒューマンスケールで、ひとりの生活人が歩いていて楽しい、多様な境界があるといいなと。そういう回路みたいなものがいっぱいある感じが面白いから、人はみんな京都に来て、そぞろ歩きをして薫習館に行くでしょう。

畑：最後はわからないですけど(笑)

細尾：回路のひとつには明らかになってると思うんですけどね(笑)。

そこに行かなきゃできないような豊かさが実現されている場所、その場所自体に魅力があるから手持ち無沙汰になったらそこに行ってみようと思える、そういう通りになったらすごくいい未来をバトンタッチできるんじゃないかなと思います。

司会：ピエンナーレなどのイベントを動かすには、大きな

エネルギーが必要になりますよね。

どういうアクションをすると実現へのリアリティが湧くのかをお聞きしたいです。

長谷：最初はやっぱりインパクトのある人がひっぱるのが大事だと僕は思っています。行政主導のものもたくさんあって、それも悪くないけれど、どこか誰か任せというか、本当にやりたいの？と思えるようなものも結構多かったですよね。

それよりも、1人でも2人でも団体でも、ひとつの強い意志を持ってまずは活動の中心となり、やっていくということが結構大事だと思っています。

実際動かした上で大事になってくるのは、そこで住む人たちとの繋がりだと思います。そこをすっからかんにしてしまうと、「あっ勝手に誰かやってはるわ」と一発で終わってしまうものになると思うので、丁寧に説明をしながら作り上げていくことがとても大事だと思います。

大きくなくてもいいし頻繁でなくてもいいんですけど、だれかの強い力でまずはスタートをかけて、そしてそこに住む人たちとも強い繋がりを持ちながら作り上げていくことがまずは大事だと思います。KYOTO EXPERIMENTやKYOTOGRAPHIEはそういう活動のスタートの仕方をしてるんじゃないかな。住む人たちと繋がっているから、今年もこのイベント始まったなあみたいになんとかみなさん馴染んでいますよね。

司会：それは、長谷さんがタクト側に回ることとは？

長谷：僕じゃなくてもいいんですけど、僕に実力がありそういう流れであれば、ぜひやりたいです。だけどそのときの流れや人っていうのがあると思うので、そういう方向を向き、そういう活動をし、そういう声を上げていけるそのときのその人がやればいいかなと。そのときの応援は絶対的にやりたいですね。そういう活動をしっかりやっていくことが、結果としてそこに住む人たちの喜びになり、そこに住む人たちが喜ぶとそこに長く住んだり、そこに住みたいという人が増えますよね。結果、うちが儲かると(笑)。

一同：(笑)

長谷：半分冗談みたいな話ですけど(笑)、そういう循環を作っていくことが、どこの街とも同じ街になってしまうところから一線を画すものになっていくんじゃないかと思っています。

司会：役者としては揃っていますよね。場所、情報発信、しつらえ、プロダクト。できることはあるので、あとは動き方ですよね。この街でイベントをしたら、どうということが面白いかなと思いますか？

加藤：京都のメインストリートで、こんなことができるん

京都は世界の中で名が通っていて、
その都市が世界に向けたイベントを
やらないのはもったいないと思っています。
その中心である烏丸はメインになりうる場所なので、
ものすごく意義のあることだと思います。

だ！みたいに思ってもらえるような内容のものがやりたいですね。

その際は先ほどおっしゃっていたように近隣の方々にひとこと声をかけるというのはもちろん、街の方々にも参加してもらえようなところを目指すのがいちばんいいのかなと。企業はこういう風に来ることができても、飲食店には繋がりたいけどどうしたらいいかわからない、というところがたくさんありますので、次のお店でも珈琲飲めますよ、あっちはピザ屋さんですよ、みたいにお店同士でも繋がってもらえると街自体が盛り上がり、外から来た人にもいい街だなと思っていただけたらと思います。私たちが繋げていく作業をお手伝いできればと。街をあげて繋がってこうとするのが大事だなと思います。

あとは町家に設けられた椅子に、歩いている方が休憩されていたり、小さいお子さんとおばあちゃんが並んでいたりと、みなさんのホッとされている姿や笑顔を見かけたりします。そういった心温まる風景を残していけたら街の人にも働いている人にもいいんじゃないかなと、そう思える空気感や生活感が烏丸通にはありますね。この街自体がさっきお話していた「おおらかさプロジェクト」みたいなものが活かせるような通りになれば、30年後も50年後もホッとするまちづくりができるのかなと。世界中に京都といえはこの通を目指そう、みたいに発信できるといいなと思います。

司会：これまではどちらかというとポジティブな話題をお話していただけたので、企業として、個人として、まちづくり協議会として、どういうことが今京都の問題にあって、こういうことをしたらいいんじゃないか、みたいなお話があれば。

長谷：ひとつあるんですけど、電気代が高い問題。家庭もそうなんですけど、僕はオフィスビルの電気代が1年くらい前から急に上がっているんですよ。2倍くらい上がって。

一同：えっ！

長谷：しかもいきなりですよ。高くなるとは聞いていたんですけど。

一度試みに建物を作って太陽光パネルを乗せて、その太陽光パネルから電気を発電して蓄電池に貯めて、そこで100%まかなえるかと考えたら、オフィスだとやっぱり60%くらいが限界なんですよ。せっかく京都は上に面が合っているので、そこに太陽光パネルをパーっと貼って、発電をして大きな蓄電池に貯めて、烏丸通みんなで融通しあって使えないかなとか。そういうことをエリアとしてできれば、電気代タダなるんじゃないかな？とか(笑)。みんなで協力して融通しあいながら使えるものができればよりハッピーになるんじゃないかと。

司会：記事ができれば、京都市のニュースレターで回したいですね。全職員さんに。

一同：(笑)

司会：他のみなさんは暮らしながら、会社に通いながらふと思ったことはありますか？

畑：ときどき警察の方が、防犯カメラの記録を見せて欲しいと来られます。いっそのこと街灯に防犯カメラがつくことで、管理面などの問題はあと思うんですけど、烏丸通全体として何か協力ができないかと考えます。

また薫習館の駐車場に地下水を組み上げる手動のポンプがあるんですけど、それを周りの方は全然知らないでしようし、そういうのを防災マップにして烏丸まちづくり協議会で作るとか。

長谷：いいですね。実は電気の発想をしたのも防災からなんですよ。

防災って、火事も地震もあると思うんですけど、いざというときみんなで協力や情報共有ができると守れる範囲が広がっていく。だからそういう繋がりができないかなあと元々ずっと思っていて。おっしゃったようにいろいろな情

報が回っていると、街の強さにつながっていきますよね。

司会：具体的には何ができるのでしょうか。

長谷：まずは何を持っていて、何ができるという情報の開示と共有ができればいいんじゃないかなと。

あとはやっぱり、いざ有事にどう連携をとって、今どういう状況なのかを共有できるようになれば。今なら畑さんのところで水がもらえるぞ！とか。緊急の蓄電池があるからうちで携帯の充電ができるぞ！とか。企業単位では情報共有の術はあると思うんですよ。それをエリア単位で持っているというのは僕はあまり聞いたことがないので、それができれば。

司会：防災のプラットフォームは、内容によってはウェブサイトが必要かもしれないですけど、今ここで水がもらえるよとか、とりあえずの共有だったらXで共有のアカウントを作ってみるとか、すぐできそうなこともありますね。

長谷：そうですね。緊急時、災害が起きたばっかりの時はほぼ不可能だと思うんですけど、一旦落ち着いた24時間後48時間後の動きとして、そういう街を復興するタイミングでそういうものが効くかもしれないですね。

最後にこの回を通して一言ずつお願いします。

長谷：まちづくり協議会を通して出会う人たちいろんなことをやっていく、みなさまといっしょに活動の場を広げていけるというのは結果として会社にとっても私個人にとってもポジティブな方に返ってくるんじゃないかなと思うので、そういう活動をこのまちづくり協議会を通してみなさんとやっていけたらと思っています。これからも呼び立てすることがたくさんあると思うんですけど、嫌がらずに来ていただけると嬉しいなと思います(笑)。

細尾：こういう風に、いずれ回り回ってポジティブな方向に向かっていくというのはやっぱりあると思います。僕も家庭や仕事とは違うレイヤーでこうしてみなさまとご一緒にさせていただいて、考える機会をいただいて、試行錯誤する機会があることが面白いなと思っています。今後もっと頻度を上げてコミュニケーションをとって、色々なことができたらずごく面白いなと考えていますので、よろしく願いいたします。

加藤：私もこのような場でないとお会いできないような方々とお話ができて、とてもありがたいなと思います。もっとみなさんの会社の社員の方も含めて交流の場が広がればいいなと、本当に思います。何か小さなことでも、それこそゴミ拾いでも、交流の場が生まれるようにこれからもみなさんのご意見を聞きながら実現に向けてやっていきたいと思っています。私どもは元々地域の活性化という役割を持っていたので、地域の活性化をご一緒にやっていければと

思っています。

畑：家庭の枠でもなく、組合みたいな営利目的の枠でもなくこうやって集まって、最終的には烏丸通の賑わいを作ろうというところを軸に集まれる機会って他にはないので、こうしてざくばらんに意見交換ができることもそうですし、新しい目線が得られたのは僕は参加してよかったなと思っています。いっしょに仕事している仲間への機会づくりにももっと繋げていけたらいいなと思っているので、これからも活動がずっと続けられるように、協力もしていきたいです。

細尾：まちづくりのことで話を聞きたい人をお呼びして、ちょっとした勉強会みたいな機会があったらお互い面白そうかなと思っています。

長谷：そうですね、次の活動へのヒントにもなりそうですね。集まる機会にもなりますし。それこそ社員さんみなさんに来ていただける総会という機会もありますので、そこで呼びかけてより大きくしていただければいいんじゃないかと。

司会：京都市としても、せっかくこういう場を作ったただ記録として残すだけでなく、次年度以降は具体的に何か小さいことでも段階的にいっしょに関われたらというのはおっしゃっていたので、協力していただきながら何かできたらと。

京都市：ぜひ、いっしょになってやっていきたいと思っています。

長谷：ぜひ。アイデアお待ちしております。

細尾：そこは投げるんですね(笑)

株式会社
HOSOO architecture
代表取締役
細尾直久さん



1981年、ミラノ生まれ、京都育ち。近畿大学国際人文科学研究所で学び、理工学部建築学科卒業。ミラノ工科大学留学を経て、David Chipperfield Architects に勤務。イタリアから日本へ帰国後、2015年京都にてHOSOO architecture を設立。建築を設計する立場から、まちづくりにどのような貢献ができるのか。都市に強い関心を持ち、烏丸通まちづくり協議会に参画。